

都市及び農村における児童の学齢による肥満の頻度

○寺井 稔*、菊地信子**、鈴木理恵**、下坂智恵*

(*大妻女子大、**研究時大妻女子大)

1. 目的 二世帯家庭を中心とした集合住宅の多い都市部と多世代同居家庭の多い農山村部に居住する小学校児童について、各学齢別に肥満傾向の児童の出現頻度を調査した。
2. 対象 都市部の小学校児童は東京周辺の新興都市2校を選んだ。農山村部の小学校は東北地方の一部山間部に広がる農産地帯の2校を選んだ。4校とも1年生から6年生目での全児童を対象に体重及び身長データを基に肥満の傾向を調べた。
3. 肥満傾向の判定 肥満例の判定検出は、各学齢の児童の体重と身長の比を計算し、その比の平均値を計算し、かけ離れた値をSmirnofの棄却検定法にしたがって計算し、除外されるべき値を示した場合に肥満と判定した。
4. 肥満例の頻出頻度 都市部の児童の肥満傾向は農山村部よりも多い傾向があった。また都市部の児童の肥満傾向は、男女ともに学齢が上がるにしたがって増加している。農山村部の児童は男女ともにごく僅かであるが、6年生に頻出の割合が多くなっている。
5. 家族構成と生活環境 農山村部で生活調査を行ったところ、食事時間はかなり規則的であり、朝夕食は家族全員そろって食事することが多いことがわかった。食事内容や間食の内容などはほとんど都市部と同じであるにもかかわらず肥満傾向が低いのは、規則正しい生活を送っていることによることが推測される。
6. 運動時間 遊びあるいは運動時間はどこもほぼ同じであり、むしろ農山村部の児童の通学は親の運転する自動車による送迎が日常的であるという意外な結果もえられた。これにはまた問題もあり別の機会に報告する予定である。